

資 料

## 新しい総合型スポーツ・ネットワークの創造

### —— スポーツ・ネット・アカデミーの試み ——

スポーツ・ネット・アカデミー

Creation of the new total community sports net work

Sports Net Academy

#### はじめに

企業と学校に依存しつづけてきた日本のスポーツ強化のあり方が行き詰まってきた現在、体育系大学の在り方やその役割についての見直しは、必然的な作業と思われる。その認識と行動の行方は、体育系大学そのものと、そこに関わる関係者の将来をも決定づける重大な局面を招来するであろう。

また、近年はスポーツ分野における高度化や多様化が顕著であり、それに伴い、あらゆる層のプレイヤーやスポーツ関係者が、有益な情報を必要としている時代である。トップを目指す一部の競技スポーツ関係者だけでなく、ママさんバレーやサンデー野球を楽しむ人達も、単なる経験主義的な発想や方法だけでは、より楽しみまた向上することも難しい。このような一連の傾向は、同時に、スポーツを展開するフィールドに、プレイヤーと指導者以外の役割が必要であるという認識を引き出している。

一方、近年の競技力向上に関わるセミナーなどにおいて、スポーツ医学やスポーツメディア、あるいは経営といった分野の講習会が頻繁に開催され、多くの一般的な指導者も多数参加している。こうしたスポーツにおける多方面にわたったりカレント教育の機会提供の増加は、ス

ポーツ活動のさらなる普及に対する社会的要請を如実に表したものと言える。

福祉や環境保護、街作り運動などといった自由な社会貢献活動などにとどまらず、「文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動」<sup>1)</sup>にまで法人格を与えることを定めた特定非営利活動促進法(NPO法:1998年12月から施行)の制定や、文部省が市町村を対象として指定する「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業(1995年度よりスタート)」および日本体育協会が地区を指定する「総合型地域スポーツクラブ育成事業(1997年度よりスタート)」などといった一連の動きは、こうした時代の要請に応じた施策であると思われる。

このような動きは、行政の指導や支援を頼みとした動きだけにとどまらず、山口東京理科大学を舞台に展開されている「大学施設を基盤とした学生と住民からなる新しいタイプの総合型スポーツクラブ構想」<sup>2)</sup>や、神戸から発信された「スポーツ・コミュニティ&インテリジェンス機構(以下SCIXとする)」<sup>3)</sup>などのような民間レベルの活動も見られ始めている。

しかし、SCIXなどのような一部の活動を除いた、こうした地域レベルの取り組みは、どちらかと言うとレクリエーション的レベルのスポーツを対象としているところが多く、競技力

向上に直結したエリートプログラムなどをダイナミックに展開しようと試みているところは少ないように思われる。

スポーツ先進国と呼ばれる国々では、高度な総合スポーツトレーニング施設やスポーツ医科学研究所、そして宿泊施設を有し、優秀な人材の育成やトップレベル選手の強化に必要なサポートを行う国家総合スポーツ施設、いわゆる「ナショナル・トレーニング・センター」に代表されるような国を挙げた強化を推進している。

アトランタ・オリンピックでは、メダル獲得総数上位9カ国すべてが、「ナショナル・トレーニング・センター」を何年も前に設立し、そこを拠点として強化にあたって成果を挙げている。このような事実は、日本におけるナショナル・トレーニング・センター待望論をさらに高め、今や「ナショナル・トレーニング・センターがなければ国際競走には勝てない」という意見が公然のものとなりつつある。

しかし、日本のナショナルスポーツセンター構想は、国立スポーツ科学センター、ナショナル・トレーニング・センター、そして国立コーチ養成研究所の3施設を中心に、優秀な人材の発掘・育成も含めてトップレベル選手の強化を総合的に行おうとするものであるが、現実的には、2001年より「国立スポーツ科学センター」が開設されるものの他の3つの施設については、文字どおり“構想”の域を脱していない状況にあるようだ。

こうした状況を考え併せると、国家レベルでの強化とは別の、たとえば民間や地方行政が主体となった地域総合型の強化拠点づくりの必要性は必然的なものと思われる。つまり中央に集めるというやり方から地方における既存のインフラや人材を利用した地方分散型の「小さなトレーニングセンター構想の推進」である。

本“スポーツ・ネット・アカデミー”（以下SNAとする）は、こうした時代の欲求に鑑み、スポーツをメインとした大学がどう応えていくべきか、といったテーマを根底に据え、「枠を越

えたスポーツ・ネットワークづくり」のムーブメントを起こそうとする試みである。

具体的には、仙台大学のインフラや人的資源を基盤とし、情報や人の交流によって地域や社会と連携しながら「スポーツ・ネットワークの創造と拡大」あるいは「スポーツの知的分野の開発や認知」を推進しようとする取り組みでもある。

そして、この試みは、新しい大学開放のあり方とその可能性、そして教員および学生の新たな研究・教育活動の場の開拓・拡大につながるものと確信する。

（勝田）

## I. スポーツ・ネット・アカデミー設立の社会的背景

### SNA 設立の社会的背景

SNA の設立は、何らかの外在的な要請を受けてスタートしたものではない。それにもかかわらず、SNA をとりまく社会情勢は、SNA が目指そうとする理念や方向性と、奇妙にもオーバーラップしているように思われる。たとえば、種目や目的や世代を越えた新しいスポーツの環境を整備しようとする行政や民間団体等の動きが近年とくに活発になっていることが、その一例として挙げられるだろう。このことはすでに「はじめに」でも言及しておいたので、ここではとくに国政レベルで注目される最近の動きについて議論したい。

日本国民の将来のスポーツ振興の在り方を検討する機関に、文部省の保健体育審議会がある。2000年6月に「スポーツ振興基本計画の在り方について—豊かなスポーツ環境を目指して—」<sup>3)</sup>（中間報告）が発表され、これが現段階では最も新しい、報告である。しかしながら、本中間報告よりも1997年9月に発表された答申の方が、SNAの活動に直結する内容を持っているので、それについて瞥見することにしよう。

同答申は「生涯にわたる心身の健康の保持増

進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」というタイトルが掲げられており、全部で9章から成っている。第3章には「学校における体育・スポーツ及び健康に関する教育・管理の充実」とあり、大学における体育・スポーツについても言及していることが、ここで重要な点である。とくにスポーツ振興における大学の貢献という項目に着目してみると「魅力ある大学として評価されるためには、スポーツの分野における多様な社会貢献が、大きく期待される。とりわけ体育系大学については、このような期待が大きい」との基本的認識がなされている。つまり体育系大学によるスポーツを通じた「多様な社会貢献」が強く要請されているということであり、この認識は本学としても十分に深く受け止めているものであろう。

では具体的にはいかなる「社会貢献」が期待されているのだろうか。まず生涯スポーツの分野では、「開かれた大学」の理念のもと、公開講座や講習会の開催等による地域住民への貢献が大きく期待されるとしている。とりわけ理論的・実践的力量を有する体育科教員の貢献や住民等のスポーツボランティア活動等の充実が望まれること。また、指導者の養成に関しては、学校体育の教員のみならず、生涯スポーツの指導者養成により重点を置く教育研究体制の整備が求められること。さらに、ここが最も重要な点であろうが、大学施設を基盤とする学生と住民とからなる新しいタイプの「総合型スポーツクラブ」の構想が考えられていることである。実際に山口東京埋科大学においては大学を利用したクラブ育成が試みられている（しかし同大学の試みでは、競技スポーツまでは視野に置いていないようである）。競技スポーツの分野においては、体育系大学等が国際競技力向上を図る上で大きな役割を果たしている。しかし大学レベルでの活躍が重視されることにより、ナショナルレベルでの活動が必ずしも十分に行えないとの指摘や優秀な選手を育成したことの評価が

指導業績として適切に理解されていないとの指摘もある。そこで体育系大学等においては、トップレベルの選手や指導者が社会活動をしやすい環境を整えていく努力とナショナルレベルの活動への適切な評価が望まれているとしている。

ただし、この答申にも問題がないわけではない。つまり結局は従来の「生涯スポーツ」と「競技スポーツ」という二分法で社会貢献の枠組みを設定していることである。さらに「知的・学術的貢献」ということもほとんど意識されていないという問題もある。SNAが構想している理念や活動の方が、むしろより進んでいると言っているのではないだろうか。すなわちSNAによる社会貢献のもっとも重要な軸は、従来の枠組を超えた「ネットワーク」づくりである。すでにSNAは両分野における各種講習会や競技力向上のためのフィットネス測定を実施してきている。また上述の答申において「各大学内においても、競技横断的なスポーツ支援組織を設けるなど、大学スポーツの活性化のために積極的に取り組む必要がある」という指摘があるが、まさに競技横断的な支援を学生アスレティックトレーナー研究会（FLC）が実践していることは特筆されてよい。さらに指導者養成に関してもSNAは学生アスレティックトレーナー研究会と連携しており、FLCは勉強会と現場での実習を積み重ねている。大学としても生涯・競技スポーツにかかわらず指導者の養成には力を入れており、資格取得予定者の現場での活動の機会が望まれる。今後スポーツイベントの開催予定もあり、公開開放講座の主管となったり、柴田町との連携による総合型地域スポーツクラブを検討したりと、制度的な追い風にも乗り、地域への社会貢献の可能性は無限に広がるものと考えられる。

（永田・中房）

## II. スポーツ・ネット・アカデミーのあり方と仙台大学との関連

「SNAのあり方」と「仙台大学との関わり」については、現在のところ以下のように考えている。

### 1. 「SNAのあり方」と「仙台大学との関わり」について

活動が生じた経緯からもわかるが、現在、活動の拠点となっているのが仙台大学であり、中心となって活動しているメンバーは仙台大学に所属する有志の教員と学生である。

スポーツに対する社会的な要請は多様化している。それがスポーツへの関わり方を多様なものにしており、スポーツ・体育系大学ではこれらの多様な活動に応える必要が生じている。これは、競技力の向上やレクリエーションとしてのスポーツだけではなく、様々なスポーツへの関わり方を模索し、学ぶ場を提供することを意味している。現在、スポーツクラブといえスポーツ種目別に構成された活動が中心となっているが、スポーツ種目にとらわれずスポーツに多角的な視点から関わる活動をクラブとして認知させなければならない。現在、SNAではこの視点からスポーツゲーム分析サークル、トレーナーサークル、あるいはスポーツイベントを企画するサークルなどスポーツ種目にとらわれず活動するサークルが発生し、内容を充実したものにしつつある。今後は、大学内外からの幅広い参加者を募るとともに、このようなスポーツへの関わり方が大学を核としながら、さらに大学の枠を越えてダイナミックに発展するような方策を模索し、生じた活動を支援していくこともSNAの重要な機能であると捉えている。

### 2. SNAのメンバーに対する考え方について

「枠を超えたスポーツ・ネットワーク作り」を標榜するSNAでは、固定的なメンバーを持たない。つまり、SNAとは活動の名称であり、特定の団体を示すものではない。

ある活動を目標としてネットワーク作りを行

う様々なベクトルを持つ活動主体が集まり活動を起こすことによって創発的な活動が生じることになる。スポーツ活動の幅広い可能性を引き出すためにこのことは必要な条件であると考えられる。活動の主体を広く求め、活動に取り込むことも今後の大きな課題の一つとなる。

(粟木)

## III. 活動の具体的目的と現在の主な事業内容 (予定されているものも含む)

### 1. 枠を越えたスポーツ・ネットワークづくり ① 大学を中心としたスポーツ・コミュニティの構築

仙台大学のインフラや人的資源(教職員と学生)を基盤として、そこから地域や社会と連携し、スポーツを媒体としたヒューマン・ネットワークやコミュニティづくりを推進する。

#### [主な予定事業]

#### ・スポーツ教室+カルチャー教室の開催

誰でも、手軽に参加できるスポーツ教室とカルチャー教室を並行して開催する。たとえば、チビッコ体操教室の開催中に、引率してきた父兄を対象としてエアロビクス教室やパソコン教室などを開催する。あるいは、大人達のための開放講座と並行して、子供達のための勉強会や英会話教室などを開催する。

#### ・トレーニング・キャンプの企画

中高などの部活動において頻繁に行われている他校との合同練習のような「場」が、さらに充実するような協力を行う。たとえば、技術コーチやアスレチック・トレーナーの派遣、フィットネス測定サポート、スキルやゲーム分析サポート(アナリストの派遣)、あるいはミーティング講師の派遣など。

#### ・情報広場の開設

情報技術を利用してスポーツ情報を発信したりし、地域のネットワークやコミュニティづくりの核となるような事業を行う。具体的には、ホームページを開設し、誰もが送受信できるス

スポーツ・イベント情報やスポーツ Q & A コーナーなどを企画する。またスポーツ・タウン情報誌といったようなニュース・レター的なものも発刊する。

② 競技スポーツのための医科学サポート体制の確立

大学内の各競技スポーツサークルや地域スポーツ団体や選手が共通して活用できる医科学サポート機能の確立と充実をめざし、地域における競技力向上サポートのセンター的役割を目指す。

具体的には、大学内の研究室機能やサークル機能を活用して「メディカル」、「フィットネス&コンディショニング」、「スキル&ゲーム分析」といったの医科学サポート機能を充実させ、学内はもとより学外のトッププレイヤーや団体などが利用できるセンター的機能の構築とサービスの提供を行う。エリートプレイヤーやコーチ(医科学スタッフも含む)のための研修プログラムや場の提供も行う。

2. スポーツの知的部分の開発や認知

「スポーツの知的部分の開発や認知」を推進するための“フォーラム”や“シンポジウム”を開催し、また“勉強会や研究会”なども立ちあげる。

加えて、従来の形式とらわれず、誰もが気軽に投稿できるような“研究紀要”などの発刊も検討する。

(勝田)

IV. これまでの経緯と活動

これまでに行った主な活動について簡単に説明する。

【井戸端会議】

学生・教員らによって立案された SNA 構想と、そのアイデアをさらに膨らませようという目的で、平成 12 年 2 月 1 日、公開討論会を開催した。討論会の名称は、結論のない自由な意見交換の「場」としたいという主催者側の趣旨から「井戸端会議」とした。

参加者は、仙台大学の教職員と学生、高校・高専体育指導者、地域スポーツ愛好者やスポーツ少年団関係者、亘理町役場の関係者など約 40 名程度であった。

自由な雰囲気の中で、現時点での活動の様子や今後の構想、協力者の発掘などに理解と協力を求め、参加者からも活発な意見が出された。

また、現在の活動として、アスレティックトレーナー研究会の活動の様子や山形スケートチームへのサポートの様子なども伝えられた。

(青島)

【フィットネス測定サービス】

1998 年より、山形県スケート連盟スピードスケート強化選手(国体少年の部出場候補選手)の最大酸素摂取量、全身反応時間、骨密度の測定を高橋研究室が中心となって実施している。

これは、公的な依頼によるものではなく、指導者個人からの要請によるものである。

本来は、山形県内にもそれらを測定できる施設は存在するが、その施設の都合と選手の都合の調整がつかず測定が不可能な状態にあった。

そこで指導者側から本学の教員を通じて個人的に相談があり、それを受けて休日を利用して本学にて測定を実施することとなった。

測定は、大学院生、研究生の協力を得て、無報酬により実施している。

最大酸素摂取量、全身反応時間は、選手にとって自分自身の現在の能力の把握とともに、次回

表 1 測定サービス実績 平成 12 年 7 月現在

第 1 回測定	平成 10 年 8 月	山形県スピードスケート強化選手 10 名程度
第 2 回測定	平成 12 年 7 月	山形県スピードスケート強化選手 10 名程度

測定時までにはその値を上げることがトレーニングを行う上での目標となっている。

また、測定は選手本人にとって現状を認識する上で有益なのと同時に、大学院生、研究生にとってもそれらの年代の選手の実測値を確認することができ非常に有益である。

骨密度については、低値を示した選手は指導者の観察でも骨折しやすい選手であり、食生活の改善を提言している。

これまでの測定実績は表1のとおりである。  
(高橋)

【ラグビーセミナー開講】

本セミナーは、主に高校ラグビーの指導者を対象として実施されたものである。

参加チームとしては、デモンストレーターとしてお願いした NTT 東北ラグビー部、仙台大学ラグビー部の他、応募参加として宮城高専、柴田高校、白石工業高校、仙台育英高校、石巻工業山形中央高校、山形南高校などのチームが参加した。

また、県内外から多数の指導者が、視察と勉強会に参加した。参加料および受講料は無料であった。第1回ラグビーセミナーのプログラムと主な内容は表2のとおりである。(勝田)

【仙台大学学生アスレティックトレーナー研究会 Four Leaf Clovers】

平成11年6月に学内学生らによって栄養学セミナーが企画・運営された事で学内でのアスレティックトレーナー活動は本格的に立ち上がった。この時の参加者は、100名を越えるものであった。この後、平成12年1月末にテーピングセミナーを開催し、同年度5月には、学内学友会から正式に同好会として認可された。現在、20名の部員が学生アスレティックトレーナーとして活動している。

当研究会の主な活動は、三つから成り立っている。

一つには、学内外のスポーツ選手、団体からの依頼を受けて学生アスレティックトレーナーを派遣し、ボランティア活動としてトレーナー活動に携わっている。現在は、仙台大学ラグビー部からの依頼を受け、専属として学生アスレティックトレーナーが活動している。同陸上部、空手部からも依頼があり、本年6月下旬に行われた東北大学総合体育大会では、大会に帯同し、貢献する事ができた。

二つ目には、仙台大学内第3体育館トレーニングセンター内での活動である。各部活だけが

表2 第1回ラグビー指導者セミナーの主な内容

	日時・会場	内容	講師・協力者
練習視察	5月17日(水) 18:45~21:00 仙台市 緑ヶ丘 NTT 研修センター	意欲的・意図的・意識的プレーを引き出すための練習 「アタック編」	勝田 隆 NTT 東北ラグビー部 仙台大学ラグビー部
練習視察	5月29日(月) 18:45~21:00 仙台市 緑ヶ丘 NTT 研修センター	意欲的・意図的・意識的プレーを引き出すための練習 「ディフェンス編」	勝田 隆 NTT 東北ラグビー部 仙台大学ラグビー部
勉強会	5月30日(火) 18:00~20:30 仙台大学 B203 教室	チームスポーツの心理学 スポーツ情報分析論	栗木一博 勝田 隆
練習視察	5月31日(水) 18:45~21:00 仙台市 緑ヶ丘 NTT 研修センター	セットプレーと一次攻撃向上のための基本的練習	勝田 隆 NTT 東北ラグビー部 仙台大学ラグビー部
合同練習	6月11日(日) 11:00~13:30 仙台大学ラグビーG	継続プレー向上のためのドリル&ゲームライクフィットネス	講師: 勝田 隆 トレーナーサークル コーチングサークル 仙台大学

表3 仙台大学学生アスレティックトレーナー研究会のこれまでの主な活動

	日時・場所	参加者数	内容・講師
1999年度	6月29日 仙台大学 B203	100名	スポーツ栄養学セミナー 管 泰夫氏 (管理栄養士)
	1月29日 仙台大学 C201	60名	テーピングセミナー 山根太治氏 (NATA 公認 ATC)
2000年度	5月		学友会同好会として認可
	5月2日 仙台大学 B201	30名	テーピングセミナー 山根太治氏 (NATA 公認 ATC)
	6月17/18/19日 宮城第2陸上競技場		仙台大学ラグビー部東北総体帯同
	6月24/25日 宮城野陸上競技場		仙台大学陸上部東北総体帯同
	7月2日 名取スポーツパーク	25名	テーピングセミナー (テニススクール生対象) 青島大輔 (学生アスレティックトレーナー研究会)
	7月3日 仙台大学 B201	30名	テーピングセミナー 田中隆行氏 (クレマー・ジャパン)

をした選手の多くは、通常の練習から離れて、このトレーニングセンターでトレーニングを行っている。ほとんどの選手が、各々の考えたメニューをこなしているのだが、けがに対するアプローチをしている選手は非常に少ないのが現状である。現在、週4日間、研究会の学生が当番制で、トレーニングセンター内に待機をし、所属部活を問わず、訪れた選手に対し、マッサージやアイシング、テーピングからリハビリテーション補助等のトレーナー活動を行っている。

三つ目には、勉強会である。テーピングの技術や、マッサージの手技など、技術的な勉強ばかりにとられるのではなく、医学、生理学、栄養学などの基礎となる勉強を学ぶことに重点を置いている。平成12年度から仙台大学でも始まった、日本体育協会公認アスレティックトレーナー資格取得適応コース制度も視野に入れ、勉強会の内容を組み立てている。将来的には、この日本体育協会公認アスレティックトレーナーの資格取得試験の合格も目指している。

また、学生だけの勉強会ばかりでなく、今までも、学外から管理栄養士を招いた栄養学セ

ミナーや、NATA 公認の ATC を招いたテーピングセミナーなど、様々なセミナーを企画運営してきた。トレーナー活動としてフィールドだけの活動にとらわれず、学内外に広くアスレティックトレーナーの存在を認知されるために啓蒙活動も行っている。学生にとっては、この様なセミナーを企画運営する事が普段では経験する事のできないマネジメント能力の開発にも影響を与えている。

これまでの主な活動は表3のとおりである。

(青島)

#### 【スポーツ・バイキング】

仙台大学のインフラや人的資源（教職員と学生）を開放し、① 地域社会に「手軽に参加できるスポーツ機会を提供する」ことと、② スポーツを通じて仙台大学の学生が、地域社会との連携を深めることを目的としたイベントを企画した。

イベント名は、「複数の競技から興味あるゲームを参加者が自由に選択できる」ことから、料理のバイキングにちなんで「スポーツバイキング」とした。

第1回目は、地域社会のスポーツ欲求調査も

目的の一つに加え、て、平成12年7月30日に開催したが、継続的に取り組んでいきたいと考えている。

学生が、スポーツ経営の実学を学ぶ場としても貴重な取り組みであると思っている。

(助友)

#### 【コーチおよびトレーナー派遣】

現在は、技術コーチやアスレチック・トレーナーなどの派遣依頼(需要)を受けて、そのニーズに応えられそうな関係団体や人物(供給側)を紹介する、といった斡旋的な取り組みに留まっている。

これまで、近隣のスポーツ少年団を中心に、ママさんバレー、中学校や高校の部活動といったところから依頼があったが、仙台市内からの依頼もあり、思った以上にニーズが多いと感じている。種目としては、バレーボール、サッカー、ラグビー、バスケットボール、テニス、といったところであった。

これらの依頼の対応や、斡旋といった事務的な仕事は、現在のところ将来スポーツマネジメント関係の仕事に携わりたいと希望している本学学生有志(若干名)が行っているが、将来的には、派遣事業を専門的に行う学生組織を立ち上げたいと考えている。

また、派遣するコーチやアスレチック・トレーナーについては、学内外から公募を行い、審査の上人材バンク化し、ニーズに応えられるようなシステムを構築したいとも考えている。

(勝田、助友)

#### V. スポーツ・ネット・アカデミーがもたらすもの

SNAのムーブメントが緒につき活性化されれば、第1章で述べた目的に関連する事項以外

の以下のようなことが創出され、その「人」や「情報」の交流はさらにダイナミックなものとなることもが予想される。

- ① 「実践(実学)の場」の提供：(主に学生に対して)
- ② 「在学期間中のベンチャービジネス・チャンス」：(学生に対して)
- ③ 学生の就職開拓
- ④ 研究フィールドの拡大
- ⑤ 大学の地域貢献とPR
- ⑥ 仙台大学の新たなアイデンティティの創造
- ⑦ 研究素材の確保
- ⑧ 各種スポーツ関連組織や機構との連携

(勝田)

#### 執筆・編集者 (50音順)

\*執筆者については担当項目の文中末尾に表示  
粟木一博、青島大輔、勝田隆、川口鉄二、助友謙一、高橋弘彦、永田秀隆、中房敏朗、仲野隆士

#### 参考文献

- 1) 平野和美,「NPO法とクラブチーム」, RUGBY FOOTBALL, 日本ラグビーフットボール協会, Vol. 48-5, 1999.
- 2) 「大学を利用したクラブ育成の試み」, スポーツジャーナル, 日本体育協会, 第6号, 1999.
- 3) 「スポーツ振興基本計画の在り方について—豊かなスポーツ環境を目指して—(中間報告)」<sup>3)</sup>, 保健体育審議会, 文部省, 2000.

(平成12年7月27日受付, 平成12年7月27日受理)